発行所
天理教祝梅分教会
千歳市祝梅 598
☎0123-29-2055
復刊第二十四号

三月　月次祭神殿講話

本日は三月の月次祭をつとめさせていただきました。

皆様には、ご参拝くださりありがとうございました。

論達第四号に、

「さらには、「人救けたら我が身救かる」と、ひたすらたすけ一条に歩む中に、いつしか心は澄み、明るく陽気に救われていくとお教え下された。」とあります。

教祖の逸話篇を調べると

四二　人を救けたら

教祖は、「心配は要らん要らん。家に災難が出ているから、早ようの人を救けるのやで。**なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合わせて神さんをしっかり拝んで廻わるのやで。**人を救けたら我が身が救かるのや。」と、お言葉を下された。

一六七　人救けたら

「それはなあ、手引きがすんで、ためしがすまんのやで。ためしというは、人救けたら我が身救かる、という。我が身思うてはならん。**どうでも、人を救けたい、救かってもらいたい、という一心に取り直すなら、身上は鮮やかやで。**」

とのお諭しを頂いた。

七二　救かる身やもの

教祖は、「救かるで、救かるで。救かる身やもの。」と、お声をかけ下され、いろいろ珍しいお話をお聞かせ下された。

おぢばへ帰った幸三郎は、教祖に早速御恩返しの方法をお伺いした。教祖は、「**金や物でないで。救けてもらい嬉しいと思うなら、その喜びで、救けてほしいと願う人を救けに行く事が、一番の御恩返しやから、しっかりおたすけするように。**」と、仰せられた。

一五五　自分が救かって

教祖にお目通りさせて頂くと、

「そうかえ。命のないとこ救けてもろうて、結構やったな。**自分が救かって結構やったら、人さん救けさしてもらいや。**」

と、お言葉を下された。

一四七　本当のたすかり

「人、皆、すっきり救かる事ばかり願うが、真実救かる理が大事やで。息をかける代わりに、この本を貸してやろ。これを写してもろて、たえず読むのやで。」と、お諭し下されて、おふでさき十七号全冊をお貸し下された。

一〇五　ここは喜ぶ所

教祖は、「おぢばは、泣く所やないで。ここは喜ぶ所や。」と、仰せられた。

一〇〇　人を救けるのやで

教祖は、「心配要らんで。どんな病も皆御守護頂けるのやで。欲を離れなさいよ。」

と、親心溢れるお言葉を頂いた。

教祖は、「**心一条に成ったので、救かったのや。**」

定吉は、「このような嬉しいことはございません。この御恩は、どうして返させて頂けましょうか。」　と、伺うと、教祖は、

「人を救けるのやで。」

と、仰せられた。それで、「どうしたら、人さんが救かりますか。」と、お尋ねすると、教祖は、「**あんたの救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。**」と仰せられた

一二三　人がめどか

教祖は、入信後間もない梅谷四郎兵衛に、「やさしい心になりなされや。**人を救けなされや。**

癖、性分を取りなされや。」と、お諭し下された。生来、四郎兵衛は気の短い方であった。

明治十六年、折から普請中の御休息所の壁塗りひのきしんをさせて頂いていたが、「大阪の食い詰め左官が、大和三界まで仕事に来て。」との陰口を聞いて、激しい憤りから、深夜、ひそかに荷物を取りまとめて、大阪へもどろうとした。

足音をしのばせて、中南の門屋を出ようとした時、教祖の咳払いが聞こえた。「あ、教祖が。」と思ったとたんに足は止まり、腹立ちも消え去ってしまった。

翌朝、お屋敷の人々と共に、御飯を頂戴しているところへ、教祖がお出ましになり、

「四郎兵衛さん、人がめどか、神がめどか。神さんめどやで。」と、仰せ下された。

一七七　人一人なりと

教祖は、いつも、「**一日でも、人一人なりと救けねば、その日は越せぬ。**」と、仰せになっていた。

と救けて頂いた御礼に人を救けることの大切さを学ばせていただきます。

この親神様が救けてくださるというひながたを忘れず、何か人さまに喜んでいただけるよう心を配らせていただきましょう。

インタビュー

飛田 徳一さん、フヨ子さん
長坂 ヒロ子さん

今回は飛田家の信仰の始まりについてお話したいと思います。

―祝梅分教会初代高橋半六先生の三女ミカエさんは、金丸徳三郎さんを婿養子として迎えました。そのお二人の間に産まれたのがトミノさんです。その後、トミノさんの親である高橋徳三郎さん夫婦は、長男長女が出直すという節から恵庭での布教を志し、大正十二年に上恵庭宣教所となりました。

一方、飛田政雄さんの父である米蔵さんは、徳三郎さんから神様の話を聞き信仰するようになりました。そんなご縁で飛田政雄さんと高橋トミノさんは、夫婦となりました。

その後の信仰について、お二人の長男夫婦の徳一さんフヨ子さん、そして長女の長坂ヒロ子さんからお話を伺いたいと思います。よろしくお願い致します。

【徳一】飛田家には祖父高橋徳三郎を始め、祝梅初代の高橋半六先生、二代恒会長さん、三代美津志会長さんが足を運んで信仰を伝えてくださいました。そのおかげで母はしっかりした信仰を持っていたと思います。当時天理教信仰をする事は厳しい状況でしたが、子供である私たちは天理教を嫌だとは思わず育ちました。祝梅の教会にもよく行かせてもらいました。父は母が信仰することや、子供や孫を教会に連れて行くことに反対はしなかったけれども、父自身は信仰には無関心でした。その父がどういう経緯で教会に行くようになったかは分かりませんが、定年を過ぎた頃から熱心に信仰するようになりました。

【ヒロ子】自分で納得して行くようになったら、真剣になって真面目に教会に行くようになりまし

た。いろんなご守護の姿を目の当たりにして信仰を深めていったのだと思います。梅かぐら布教所となって「毎月十七日にはお参りに来てほしい」と言うので、私達夫婦も他の兄弟達も参拝させていただくようになりました。

―祝梅の月次祭には、ご夫婦で毎月前々日からJRで来て、ひのきしんしてくださっていましたね。

【ヒロ子】父母は祝梅の月次祭を楽しみに毎月参拝させていただいていました。でも高齢になりJRの列車の中で倒れたりすることもあり、心配だったので私が運転して車で一緒に参拝させていただくようになりました。

【徳一】当時、私は仕事があったので思うようにならず、兄弟や家内が協力し両親を教会に連れて行ってくれて、本当に感謝しています。定年後には自分も修養科に入らせていただき、父母とともに教会へ運ばせていただくようになりました。私も家内も、そのおかげで信仰を深めさせていただいたと思います。

【フヨ子】本当にそのおかげで守っていただいてきました。

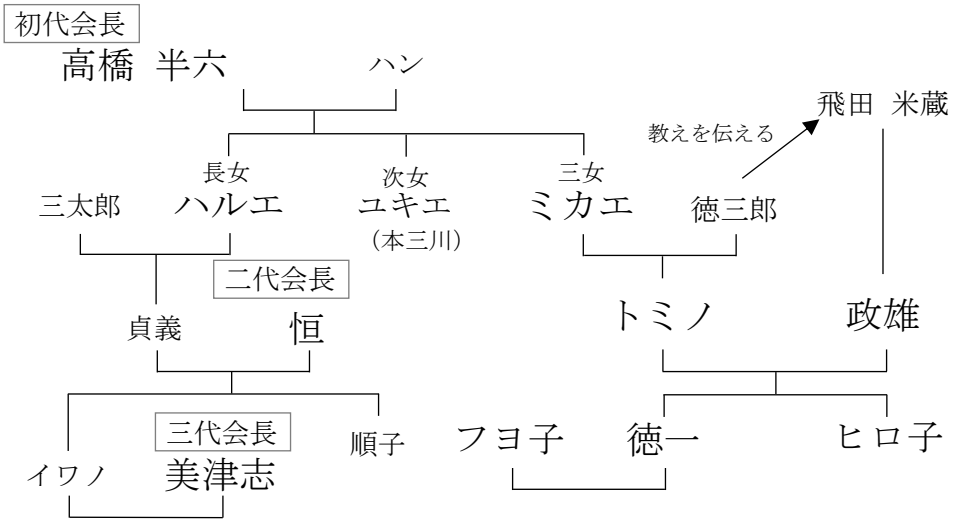
―今でも思い出されるのが、トミノさんが神様の前で、子供さんや孫さんのことを真剣にお願いされている姿です。それが小さな声だけど聞こえてくるんです。真実な方だなと思いました。

【フヨ子】そんな親の姿を見ていたから兄弟みんな親想いで仲が良いのですね。義父や義母が出直して十数年経ちますが、十七日には今も兄弟達がお参りに来てくれます。兄弟の仲が良いことが本当の財産だと思います。私も義母を見習っていきたいと思います。

【ヒロ子】母は出直す最後の時まで手を合わせて「ありがとうございます」とお礼を申し上げておりました。素晴らしい出直しでした。

―政雄さんは九十六歳、その翌年トミノさん九十一歳で出直されました。お二人とも出直されるその月の最後の月次祭まで参拝にこられました。

また、そんなお二人と旭川から千歳までの遠距離を乗せて、車で参拝に来られたご家族の姿を、親神様、教祖もお喜びくださっていた事と思います。お話を聞かせていただきありがとうございました。



布教の家（愛知寮）入寮

高橋悟志（教会後継者）が春から、美津志会長、太志会長がお世話になった布教の家・愛知寮で一年間布教させていただきます。

↓個別訪問する悟志

夕張団
おつとめ総会のご案内

５月２１日（日）夕張大教会にて
おつとめ総会が行われます。
祝梅分教会は他の教会と合同で、
九～十二下りをさせていただきます。

『人救けは』

○不幸な者が、他人の世話をすると、
世間の人は「自分の頭の蠅も
おえないくせに」と、冷笑するが、
しかし、蠅は自分の手ではらわずとも、
躰が動けば、自然に逃げていく。

●つまり、このように、たとえ、
いくら運が悪くても、
人のために誠をつくしていけば
悪い運は、自然に自分から離れていく

○だから、人救けは、
悪運をはらう玉ホウキ

第四十一若人会総会　報告

三月二十一日（祝・火）、会員・スタッフ十七名、教会・ひのきしんの方々十八名 総勢三十五名がつどい、総会をつとめさせていただきました。今年も新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するため、座りづとめ、よろづよ八首を執り行い、その後は会長様から御祝辞をいただき、委員長の挨拶、記念撮影を短い時間で実施いたしました。まだ従来通りの若人会総会とはなりませんが、今年も実施出来たことを大変嬉しく思っています。これもひとえに、教会・ひのきしんの方々やスタッフの方々のご支援とお力添えの賜物です。今年度の行事も実施することが難しい場合があると思いますが、その都度スタッフで相談し、出来ることを精一杯務めさせていただきたいと思います。

祝梅若人会委員長　伊藤伸幸

あとがき

「人を救けて我が身救かる」のお言葉から思い出されるのは以前「夜回り先生」で有名だった水谷修氏の言葉です。

自暴自棄になっている子供たちからのメールが日に何十件と来るようになり、対応しきれない中、とにかく伝え続けた言葉が「何か人のためにしてごらん。ありがとうの言葉が自分の力になるから」だったそうです。

メールしていた子供達の中には中学生も多かったそうです。

おぢばでは、同じ年代の中学生を対象とした、夏のこどもおぢばがえり「少年ひのきしん隊」があります。テーマが「人のために尽くす喜び広げよう」こどもおぢばがえり中、ひのきしんする子供達の顔は輝いていましたね。

コロナ禍で夏のこどもおぢばがえりが開催出来ませんでしたが、今年は開催される事になりました。一人でも多くの子供達におぢばに帰ってもらいたいものです。